

一心寺かわら版

第十二号 平成二十年一月発行

新年あけましておめでとうございます。

旧年中は興隆正法、護持運営に御助力いただきまして有難うございました。

去年は世相を表す漢字に「偽」が選ばれ、また、県内でも悲惨な事件が起こり、暗い話題が多い一年だったように思われます。人それぞれ感じるものがあつたでしょうが、「みんなの県政THE香川」十月号に「教え」と題した真鍋知事の仏教に関する一文がありました。



真鍋知事は、外国で「あなたの宗教は」と聞かれたら「仏教徒です」と答えるが内心忸怩たる思いだとおっしゃられます。昔は両親や祖父母の姿から「習わぬ経を覚えた」、いのちの大切さや嘘を言つてはいけないなどと教えられたものが現在はそのはなつていないようである。そういう今、私たちはどうやって自分を律したらよいのでしょうか、と問いかけておられます。

「浄土真宗」とは、単なる宗派の名前ではなく、「浄土の真(まこと)を宗(むね)とする」ということです。「偽」でなく「真」を求める教えであり、それが私たちの救い、しあわせへの道であることを親鸞聖人がお伝え下さっているのでしょうか。

みなさまにとって本年が、真宗のみ教えを通してしあわせを感じる年となりますよう念願いたします。
南無阿弥陀仏

「お念仏 如来の心に 遇う時間」(松枝崇師)

本年の仏教青年会柱掛け法語、松枝崇(まつがえたかし)師のことばです。

私たちが称えるお念仏が如来(仏さま)の心に遇う時間であるとはどういうことでしょうか。

浄土真宗のお念仏は、仏さまの呼び声であると言われます。なぜならば、浄土に生まれよという阿弥陀仏の願いが込められた「本願念仏」であるからです。前年の柱掛け法語にあつたように「若生者不取正覚」、あなたが浄土に生まれることができないならば私はさとの境地(仏)には入らないと誓われ、私たちの往生の道を成就されたのが阿弥陀仏です。

人間が生きていく上には必ず悩み苦しみが生まれます。その時どうするでしょうか。身近にいる人に自分の悩み苦しみを聞いてもらうことによつて心を落ち着けようとするところがあるでしょう。そして、ただ聞いてもらうだけではなく、自分の心を理解してくれる相手に出会つてこそ本当に落ち着くのでしょうか。人間は強そうに見えても実のところ弱い存在であり、自分を心底から理解し、支えてくれる相手を求めて生きているのではないのでしょうか。その第一は家族、親ということになるでしょう。

確かに親心は有難いものです。しかし、その親心、人間の持つ慈悲の心というものは親鸞聖人によると

「慈悲に聖道浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐるること、きはめてありがたし。」

（『歎異抄』）

とある聖道（自力）の慈悲でしょう。人間自らの分別による慈悲では、相手を憐み、悲しみに寄り添い、育もうとしても思うように助けることはできません。なぜならば、自己中心的な欲を持つて自ら苦しんでいるものが、他を助けることなどそう簡単にはできないからです。

その証拠に我が家でも度々親子喧嘩が起こり、尽きることはありません。親子として互いに助けたいと思っているには違いないのですが、それが体現されることは難しいのです。

親鸞聖人も四十二歳と五十九歳の二回にわたって自らの力を持って人々を救おうとされ、浄土三部経の千回読誦を試みられました。聖人は家庭をあげて庶民とともに生活をされる中でその苦しみに心が痛み、人々を思う気持ちの強さから思わず読誦されたのでしょうか。しかし、聖人は数日でこれを取りやめ、自力に執着したわが身を省みて念仏の生活に帰られました。念仏生活こそが慈悲の実践であると見出したのです。

浄土に生まれるということとは

「彼なく我なく、競なく訟（じゆ）なし。もろもろの衆生にお

いて大慈悲繞益の心を得たり。」（『無量寿経』）

自分とその他の区別も、競うことも争うこともない。慈悲の心ですべてのいのちに利益を与えるものとなるということですから

「浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。」（『歎異抄』）

浄土に生まれるべく阿弥陀仏の本願を聞き念仏往生して、その大慈悲によって思うがままにすべてのいのちを助けることができる身となることを一大事と考えるのです。

浅田正作という方の詩に次のようなものがありました。

「自分が可愛い　ただ、それだけのことで生きてきた

それが深い悲しみとなった時　ちがった世界がひらけて来た」
私たちはまず家族、親を通してほのかな慈悲を感じます。そして本当の慈悲に満ちた世界に生きることがしあわせであると思ひ至ります。しかし、自らはそういう慈悲を持ち合わせていない、それを悲しみつつ、私を包む「大慈悲」に目覚めていくのでしょうか。

両親や近親者を亡くした多くの念仏者が、「この世で亡くなった人と会うことはできない、言葉を交わすことはできないが、南無阿弥陀仏とお念仏するところに仏として出会うことができる」とおっしゃっています。子を救いたいと願ひ続けている親が浄土往生の道を行んでこそ、また、仏となってこそ本当の親心、慈悲がいつでもどこでも子に届けられるのでしょうか。

先人は、「念仏は自分も他人もすべてのものが、人間では解くことのできない生死の不安と愛憎の苦悩に満つるこの世の中で、安住して生かされていくただ一つの教法である」と伝えられました。また、つらいことや悲しいことがあつたらそのまま念仏すればよいと教えて下さいました。

お念仏は智慧と慈悲のはたらきです。私の悩み苦しみの本質は、我欲によって自らのいのちを限りあるものとして他と分別しているためであった。その私にかぎらないのちの仏となる道を歩んでほしい、どんなことがあつてもあなたを見捨てることはないという仏さまのあたたかい親心に会い、それに応えて称えるのがお念仏なのでしょう。

仏のこころは 不思議なものよ めにはめえねど 話ができる
仏と話をするときは 称名念仏これがはなしよ (浅原才市)

お経ってなあに？⑧御勸章(ごかんしょう)



法事の最後には、お説教とともに「御勸章」「御文章」「御文」とも呼ばれる)が読まれます。「聖人一流の御勸化のおもむきは…」や「それ人間の浮生なる相をつらつら観ずるに…」など耳にしたことがあるでしょう。

「御勸章」は本願寺第八代蓮如上人が門下の道俗に与えられた教義に関する消息で、二百通以上が残されています。第九代実如上人もと編纂されたといわれ、五帖八〇通として流布しています。制作年次が明らかなものの中では、吉崎(福井県)時代のものが多く、上人による精力的な教化が窺われます。

これを朗読して人に聞かせることは蓮如上人在世当時に始まっていたという記録も残っています。また刊行されたのは天文年間(一五二二〜)といわれ、時代の進むとともに一般にも広まってきただけでなく、蓮如上人は本山興正寺の歴代ではありませんが、真宗の教えが分かりやすく説かれているとして、当派でもお説教に取り入れています。

以前、門徒宅にお参りした際に、先人が自らの筆で写し取った御勸章を拝見したことがあります。刊行本が手に入りにくかったこともあるのでしようが、自らの手で写すことによって、その教えを深く味わわれたのだろうと感じ入ったことです。